

いぶつ 出土した遺物

今回の調査では多数の瓦と少量の須恵器(坏・甕)が出土しています。大部分が焼成に失敗して捨てられた平瓦や丸瓦の破片で、軒丸瓦・軒平瓦・鬼板も少し含まれています。丸瓦には「下」の文字がヘラ書きされたものもあり(写真3)、「下野」「下総」など瓦の生産を負担した関東地方の国名を示している可能性があります。また、凸面に蓮花文を並べて捺した平瓦(写真4・5)は、本瓦窯跡でのみ出土しています。

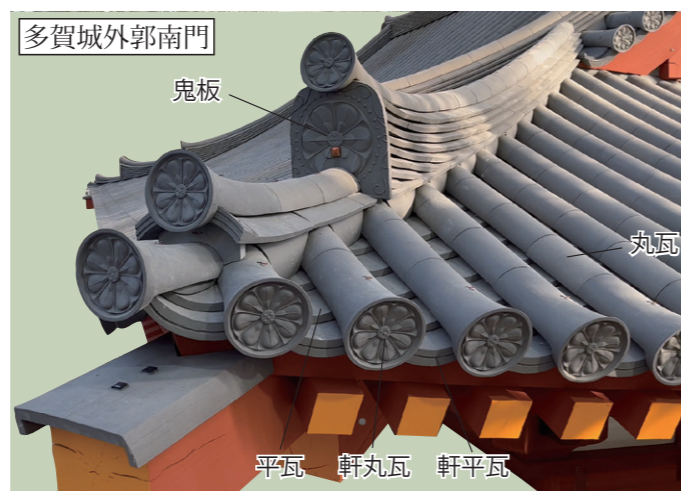


図4 瓦の名称



大吉山瓦窯跡第3次調査出土遺物

まとめ

指定地の西部を調査したことで、大吉山瓦窯跡の全貌がほぼ明らかになりました。本瓦窯跡には7基の窯と焼成土坑2基があり、多賀城創建期の瓦が焼成され、燃料の木炭もすぐそばで生産されていたことが判明しました。創建期の窯跡群で木炭窯が発見されたのは初めてで、窯場の構成や生産体制を考えるうえで重要な成果です。また、出土した鬼板や軒丸瓦などの特徴的な瓦は、工人集団や技術の移動などを知るうえで貴重な資料です。

たがじょうそうけんき かわらがま 多賀城創建期の瓦窯

だいきちやま

大吉山瓦窯跡

はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では、奈良・平安時代の陸奥国府・多賀城と関連する県内の遺跡の発掘調査を計画的に実施しています。

多賀城は今から約1,300年前の奈良時代に創建されました。その建物の屋根にふかれた瓦は、約23～35km北の大崎地方で焼かれたことが分かっています(図1)。これまでに日の出山窯跡群(色麻町)、木戸窯跡群(大崎市田尻)、下伊場野窯跡群(大崎市三本木・松山)の発掘調査が行われており、そのうち一部は国の史跡に指定されています。

大吉山瓦窯跡は江合川の左岸、標高40～50mの丘陵斜面に立地し、周辺には小寺遺跡・杉ノ下遺跡などの奈良時代の遺跡が多く分布しています(写真①)。昭和47年頃の農道工事の際に窯が発見され、出土した瓦が多賀城の瓦と同じであることから、昭和51年に国の史跡に指定されました。当研究所では、令和3年度から大崎市教育委員会の共催を得て発掘調査を実施し、指定地東部の窯の規模・構造・年代などが明らかになっています。

今回は、窯跡全体の様相の把握を目的として、指定地西部を対象に発掘調査を実施しました。

調査要項

所在地：宮城県大崎市古川小林字浦越地内
 調査指導：多賀城跡調査研究委員会(委員長 佐藤 信)
 調査主体：宮城県教育委員会(教育長 佐藤靖彦)
 共催：大崎市教育委員会(教育長 熊野充利)
 調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所
 大崎市教育委員会文化財課
 調査期間：令和5年5月22日～8月上旬(予定)
 調査面積：約400㎡

第3次発掘調査現地説明会資料

令和5年7月22日(土)

宮城県多賀城跡調査研究所

大崎市教育委員会



図1 多賀城創建期の瓦生産遺跡と供給先



写真① 上空からみた大吉山瓦窯跡(北側から、令和3年度撮影)

発掘調査の結果、窯跡 3 基 (SR5～7) とそれに伴う灰原、焼成土坑 2 基を確認しました。

窯は方向を揃えて約 3m 間隔で並んでいます。いずれも「地下式^{そら}窖窯^{あながま}」とよばれる構造で、斜面をトンネル状に掘って焼成部・焚口とし、斜面上方には煙道が掘られています(図2参照)。煙道は、SR5・SR6 は奥壁、SR7 は焼成部右側壁にあり、SR7 では地山を約 0.8m トンネル状に掘り抜いています(写真④)。また、SR7 には前庭部から斜面下方に延びる排水溝もつけられていました(写真③)。

窯の規模は精査した SR7 で測ると、窯体の長さが約 5.5m、幅が焼成部で約 1.7m、焚口で約 1.4m、前庭部で約 2.5m あります。

出土した遺物から、SR6 では瓦と少量の須恵器、SR7 では木炭を焼成したとみられます。多賀城創建期の窯跡群で木炭窯が発見されたのは初めてです。

焼成部^{しょうせいぶ}：製品を焼成するところ
焚口^{たきぐち}：まきをくべるところ
前庭部^{ぜんていぶ}：製品の出し入れなどの作業をするところ
灰原^{はいばら}：かき出した炭や焼土、失敗作の瓦などがたまったところ

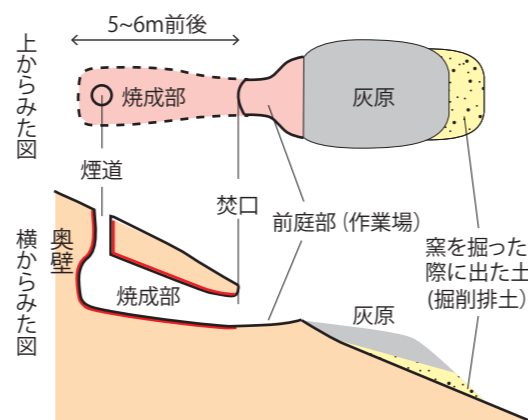


図2 地下式窖窯の構造



写真② SR5～SR7 窯跡の検出状況(南から)



写真③ SR7 窯跡(南東から)



写真④ SR7 煙道(南西から)



写真⑤ SR7 焼成部横断面(南東から)



図3 大吉山瓦窯跡の調査状況